

|         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 氏名(国籍)  | 李承英(韓国)                           |
| 学位の種類   | 博士(言語学)                           |
| 学位記番号   | 博甲第3586号                          |
| 学位授与年月日 | 平成17年3月25日                        |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当                      |
| 審査研究科   | 文芸・言語研究科                          |
| 学位論文題目  | 室町期抄物における漢字音研究<br>- 『玉塵抄』を中心として - |
| 主査      | 筑波大学教授 博士(文学) 湯澤 質 幸              |
| 副査      | 筑波大学教授 Ph.D. カイザー・シュテファン          |
| 副査      | 筑波大学教授 高田 誠                       |
| 副査      | 筑波大学教授 博士(言語学) 坪井 美 樹             |
| 副査      | 筑波大学助教授 大倉 浩                      |

### 論文の内容の要旨

本論文は、『玉塵抄』を中心とする室町期の抄物を資料として、室町期抄物における漢字音研究の実態を明らかにすることを目的としている。

漢籍や仏典また国書の注釈書である抄物は、原典理解のために様々な文献を用いて漢字や漢語などの音や意味、用法を説明している。そして、さらには、独自に漢字の研究をも広く押し進めている。したがって、抄物は当時における漢字研究を知る上で貴重な資料となっているが、数多い抄物にあって特に惟高妙安が元代の韻書『韻府群玉』(1334)を講述した『玉塵抄』(1598)は、原典の『韻府群玉』が韻書であることから、室町期における漢字音研究のあり方を知る上で有力な資料となっている。この点に着目して、本論文は、『玉塵抄』を中心とした室町期の抄物を主な資料として、当時における漢字音研究の実態を明らかにしようとしている。

そのために、まずは、『玉塵抄』とその原典である『韻府群玉』を引用文献の面から比較して、『玉塵抄』において、中国の文献がどのように受容されたのか、どのような漢籍が重視されていたのかを明らかにし、次に、それによって漢字や漢語についてどのような研究がなされていたのかを検討する。その後、直接漢字音研究と関わりのある字書や韻書はどのくらいあり、そしてどのようにまたどのくらい利用されていたのかを追究して、『玉塵抄』の漢字音研究資料としての基本的な性格を把握している。

以上のような文献学的な考察を踏まえて、惟高妙安講述の『玉塵抄』を主資料として室町期禅宗では、漢字音の系統のことや清音と濁音のことをどのようにとらえていたのか、どのような漢字音をどこで使うべきとしていたのか、どのようにして正しい漢字音を得ていたのか、また漢字音の読み方に関わってどのような読み癖が存在したのかなどといった、漢字音研究に関するいろいろな問題の解決を試みている。そして、最後に、それを通して当時の禅宗における漢字音研究のあり方を明らかにしている。

本論文は、全9章からなっている。

#### 第1章 序論

本論文の目的と意義を述べるとともに、本論文の構成を示している。

## 第2章 資料と先行研究

本論文の主資料である『玉塵抄』及びその原典『韻府群玉』を紹介すると同時に、本論文で取り扱う他の抄物や韻書また辞書などについて述べる。その後、『玉塵抄』その他の抄物を資料としてこれまでに行われた、室町期漢字音研究の研究の歴史を概観する。

## 第3章 『玉塵抄』における引用文献 -『韻府群玉』との比較-

『玉塵抄』とその原典である『韻府群玉』の引用文献を比較することによって、『玉塵抄』と『韻府群玉』の性格の相違を浮き彫りにしている。すなわち、『玉塵抄』は原典『韻府群玉』を踏まえながらも独自に別の文献を用いて独自の講釈を行なってもいる一種の百科全書的な抄物であること、また、『韻府群玉』が用いていない字書や韻書なども用いて漢字音研究を積極的に行っているものであることを明らかにしている。

## 第4章 『玉塵抄』における韻書

第3章での引用文献の調査に基づいて、韻書の利用という観点から、『玉塵抄』における漢字研究、漢字音研究のあり方を考えている。そして、妙安は漢字音研究においては『韻会挙要』を最も重視しており、続いて『玉篇』を反切の面で重視していること、『韻会挙要』と『玉篇』は漢字音研究で単独で用いていることもあること、その一方、一般注としての引用においては、『韻府群玉』と『韻会挙要』の両書、特に『韻府群玉』を重視していることなど、利用された韻書それぞれのその利用のされ方、重視のされ方を考察している。

## 第5章 『玉塵抄』における呉音と漢音

『玉塵抄』の中で漢字の字音の系統と対立について説明しているところを取り上げ、室町期の学問の場における呉音と漢音の伝来についての見方、またその当時における漢字音と漢字音との対立の実態を把握した上で、『文明本節用集』を参照しながら、それら対立している漢字音同士の関係やそれと呉音漢音の関係など検討している。そして、『玉塵抄』の中に見出される仏典と漢籍における字音の対立、日常的な生活の場における字音と学問の世界の読書音との対立などは、呉音・漢音の対立に関連していると主張している。一方、一般に慣用的に行なわれている音と韻書等から導かれた規則的な音との対立や、自分が所属しているところでの音とそうでないところでの音の対立は、呉音・漢音の別とは直接関係していないことを明らかにしている。

## 第6章 室町期抄物における漢字音の清濁 -『玉塵抄』と『詩学大成抄』を中心として-

『玉塵抄』と『詩学大成抄』の中で、漢字音の「清」「濁」について触れているところを取り上げ、抄文中でその「清」「濁」の注記がどのように加えられているのか、どのような場合に、あるいはどのような根拠のもとで「清」「濁」の傍記または注記がなされているのかなどといった問題を、『日葡辞書』を参照しながら検討し、次のような結論に達している。

- (1) 傍記すなわち「清(スム)」傍記：主として漢籍の正統な読書音である漢音系の字音を示すために加えられた。
- (2) 注釈：(ア)「清」注釈は、漢籍において清音であるべきものが濁音に読まれるおそれがある場合、もしくは、連濁を避けるために行なわれた。(イ)濁音字への「濁」注釈はその当時の日常音を、清音・次清音字への「濁」注釈は読書音としての濁音をそれぞれ示すために行なわれた。(ウ)「清」「濁」注釈は、読書音における清濁上の読みの乱れと呉音・漢音における清濁の対立との関係を示すために行なわれた。

## 第7章 『玉塵抄』における反切と字音

『玉塵抄』の中で、字音認定の根拠となっている反切とそれに関わる字音を取り上げて、その反切がどのように解釈され、また用いられているのか、その実態を引用文献と反切による字音認定の方法という二面から検討している。次に、その反切から導き出された人為的な字音が、実際に使用されている音とずれているのか、またずれている場合講者惟高妙安はそれをどのように処理したのかを、『文明本節用集』の漢音を参照しながら論じている。その結果は以下のようなものである。

- (1) 反切は、惟高妙安が字音の読み方を決めて行く上での重要な根拠となっている。彼は反切については、主として『韻府群玉』を、ついで『玉篇』『古今韻会举要』『広韻』等の中国韻書を、さらには国書である『聚分韻略』などを用いている。
- (2) 反切音を導く方法としては、五十音図を利用したいわゆる仮名反を用いている。
- (3) ((1) で述べたように) 妙安は、反切音を重視していたが、反切音と現実音とが異なる場合は現実音を優先している。
- (4) 反切音による字音はその当時における漢音とかけ離れている場合もある。一方、現実音は『文明本節用集』で漢音として示されるものほとんど一致している。

## 第8章 室町期抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ヅカイ)」-用語の分布と意味-

漢字音に関わる記事が比較的多い『玉塵抄』その他の漢籍の抄物に焦点をあて、「ヨミクセ」「ヨミツケ」などの語句の有無を調べて、室町期当時「ヨミクセ」などの語句がどのような漢籍の抄物において用いられていたのか、「ヨミクセ」などはどのような読み方に対して用いられていたのか、また、読み癖と当時の呉音・漢音、あるいは読書音とはどういう関係にあったのかなどについて検討を加え、次のような結果に至っている。

- (1) 禅宗系抄物にしか現れていない「ヨミクセ」「ヲシツケ(ヨミ)」の内、「ヨミクセ」は『史記』『漢書』での特別な読み方であった。
- (2) ((1) に対して)「ヲシツケ(ヨミ)」は、『史記』『漢書』を勉強していない人の読み方であった。
- (3) 禅宗系博士系抄物両方に現れている「ヨミツケ」は、いろいろな漢籍の漢語や人名・地名などに広く用いられていた、主として呉音系の字音であった。
- (4) 禅宗系博士系両方に現れている「名目」は、平安初期以前に成立した旧仏教や公家その他に伝統的に伝えられていた読み方であった。

## 第9章 結論と今後の課題

各章で述べたことをまとめて、本論文の結論としてそれを提示した後、今後の課題について述べている。その中で、仏教の一宗派でありながら室町期当時日本で儒学がもっとも盛んに学ばれていた禅宗においては、旧仏教のそれも取り入れた漢字音研究が盛んに行われていたと主張している。

### 審査の結果の要旨

日本漢字音研究史の解明において、室町期はこれまでほとんどその対象とされてこなかった。それは資料に恵まれないためであるとされてきた。このような状況の中で、本論文は、膨大な量にのぼる禅宗抄物の精査を通して、この室町期における漢字音研究の実態の解明と史的立場づけを試みている。ここにまず筆者の旺盛な研究心を見ることができる。

本論文の成果は多々あるが、おおよそ次の三点にまとめられる。

- (1) 主資料とする『玉塵抄』における引用文献の調査から、この書が漢字音研究を積極的に行っていること、そして、室町期漢字音研究史資料としてきわめて価値が高いことを明らかにしていること。
- (2) 室町期禅宗において、どのような漢字音研究がいつ、どこで、だれによって、またどのように行われていたのか、さらに、その漢字音研究で論じられている字音は当時一般社会で使用されていた漢字音とどのような関係にあったのか、その実態を実証的に解明していること。すなわち、数多くの抄物の多量かつ具体的な講述を軸としつつ、古辞書や外国資料なども駆使して、室町期禅宗における漢字音研究の全体像を描いていること。
- (3) 前記(2)を踏まえて従前の説に反論を加え、古代から近世に至る漢字音研究史の中に室町期のそれを適切に位置づけていること。

以上のように本論文は高く評価されるが、なお今後に残された課題も若干ある。例えば、禅宗の漢字音研究と禅宗以外の仏教各宗派や博士家のそれとの関係、あるいは個々具体的な事柄における鎌倉期また江戸期漢字音研究と室町期のそれとの関係などは、早急に解明されることが望まれる。しかしながら、もとよりそれによって本論文の日本漢字音研究に対する貢献度が減じるわけではない。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。